

原著 (Article)

熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ (XIV)

——北粕谷区本と大野庄周辺の熊野信仰修験——

**Kumano-Kanjin-Jikkai Mandara and Its Roots (XIV):
Background of Kitakasuyaku's Collection, Kumano Faith
and Shugen near Ohno Sho**

宮川 充司*
MIYAKAWA, Juji*

要 旨

北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅・那智参詣曼荼羅は、知多市指定文化財の指定を受けている熊野信仰に関連した民俗文化財である。これらの絵画が伝来した旧知多郡大野庄北粕谷村八社明神の周辺について、江戸期の熊野信仰や修験についての資料を分析した。

キーワード：北粕谷村，大野庄，熊野信仰，修験

Key words : Kitakasuya Village, Ohno-Sho, Kumano faith, Shugen

隨應寺十王堂念仏と大野谷虫供養，八社神社と熊野信仰

室町時代後期から江戸時代中期にかけて、熊野三山への勧進のために熊野比丘尼と呼ばれた女性宗教者が各地で活動していたといわれる。その熊野比丘尼達が、勧進のための絵解きに使用したのではないかと考えられていた民俗絵画の1つが熊野観心十界曼荼羅である。その学術的研究は小栗栖 (2004) により体系化され、さらに小栗栖 (2011) により完成の域に到達した。小栗栖 (2011) は、熊野観心十界曼荼羅を、定型本・模写本・別本に分類し、特に熊野比丘尼が所持し絵解きに用いたものとして伝来したと考えられるものを42例の定型本として、甲・乙・丙の3系統、絵画の表現形式からI～XI形式に分類した。また、その熊野観心十界曼荼羅を一具として那智参詣曼荼羅が伝来しているものを8例 (8組) 挙げていた。小栗栖 (2011) 以降新たに確認された作例として、宮川 (2019) はその43例目となる北粕谷区本の作例を報告した。また、この北粕谷区本は那智参詣曼荼羅を一具として伝来した9例目のものと位置づけた。また、愛知県内の確認例として、熊野観心十界曼荼羅としては一宮市 (旧尾西市萩原) の浄観寺本、岡崎市の福聚寺本について3例目、那智参詣曼荼羅としては岡崎市の明星院本に次いで2例目であった。浄観寺はかつて浄土宗の尼寺、明星院は修験道の寺院として所在したものであった。臨済宗妙心寺派の福聚寺は修験や熊野比丘尼との関係は定かではない。また、北粕谷区本と名付けた熊野観心十界曼荼

羅は、小栗栖の分類からは、甲系統Ⅱ形式という、熊野観心十界曼荼羅が制作された年代からは、比較的初期の素朴な絵画表現形式を留めるものであることが、属性を数値化し多変量解析の1つ、階層的クラスター分析の手法で分析・分類した結果、判断できた。甲系統Ⅰ形式に分類される興善寺本も、時代的にもっとも古い表現形式をもちながらも保存状態がよいものであるが、この北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅はほとんど無傷といっても良い状態のまま伝世されており、他のどの熊野観心十界曼荼羅と比べてももっとも良い保存状態で伝来されているものである。

宮川(2020)は、北粕谷区本那智参詣曼荼羅および熊野観心十界曼荼羅が伝来した、知多市金沢の八社神社と隨應寺十王堂に関する附帯資料を調査検討した。北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅が伝来した隨應寺十王堂は、明治初年の神仏分離令までは、隣接する八社大明神(現在の八社神社)の鳥居右手前にあり、それを明治初年に臨済宗妙心寺派の古寺流水山隨應寺の境内に移築したものだという。北粕谷区本那智参詣曼荼羅が伝来した八社神社は、江戸時代まで、旧大野庄の村々の惣社とされた社で、古社名を八社大明神といった。八社という名称は祭神に別名で、熱田大明神、伊勢皇大神宮、八剣大明神、熊野大権現、多度大権現、八幡宮、牛頭天王、源大夫の社が祀られていたことによるという。このうち、八剣大明神は熱田神宮の別宮で、現在の八剣宮、源大夫は古代豪族尾張氏の祖先神乎止与命を祀る現在の熱田神宮の摂社上知我麻神社の江戸時代までの別名である。また、牛頭天王は現在の津島神社を指す。祭神は、尾張の熱田・津島の古社、大野湊の対岸にある伊勢・熊野・桑名の社と、源氏の氏神八幡神で、知多半島の各地の社で祀られている代表的な神々が一所で祀られているところが、いかにも旧大野庄あるいは大野谷の惣社とされた所以であろう。惣は中世に村々が構成した連合体をさすが、大野庄ないし大野谷の村々が構成した連合体の総氏神といった意味を持っていたのであろう。その惣の名残ともいえる民俗行事が、知多半島の各地区には残っている。その一つが、坂本(2019)による民間念仏信仰に関する研究を体系的にまとめた『民間念仏信仰の研究』の中でも、取り上げられている。知多半島は、地域ごとに複数の村々が共同で、虫供養と呼ばれる民俗行事を行ってきた地域である。坂本によると、知多半島には11の地域ブロックに、虫供養行事が伝承されてきた。そのうちの大野谷虫供養とよばれる伝統行事が、規模の大きな虫供養である。

旧大野庄は江戸初期では二十一か村から構成される庄であったが、そのうちの大野谷十三か村と呼ばれた村々の干支による年ごとの輪番によって、この大野谷虫供養が維持されてきた。大野谷は、常滑市大野町(旧大野庄大野村)にあった大野湊を河口とする矢田川一帯の総称で、旧村は行政区としてそのまま名前を残しており、ほぼその区ごとに公民館が設置されている。子年北粕谷、丑年矢田、寅年大興寺、卯年西之口、辰年松原、巳年南粕谷、午年小倉、未年宮山・石瀬、申年榎戸、酉年大野(別称権現)、戌年大草、亥年羽根の順である。未年は、規模の小さな2つの宮山地区と石瀬地区(旧村)が共同で輪番をこなしているという。また、酉年の大野は別名で地区

名を権現という呼称でも呼ばれるが、なぜこの地区を権現と呼ぶかについては、あとで論じるこの村が祀っていた牟山権現（現在の小倉神社）と江崎権現（現在の江崎神社）という2社の権現社が関わりをもっていたと考えられる。

さて、前稿では北粕谷区の八社神社に伝わる文明二年（1470）から幕末までに棟札、隨應寺十王堂および十王堂念仏について、附帯資料の調査を行った。隨應寺十王堂では、お盆と春秋の彼岸に、熊野観心十界曼荼羅を十王堂の壁に掛けて、十王堂念仏を行っているというので、2019年8月16日の送り盆の日と同年秋彼岸中日の9月23日に行われた2回の隨應寺十王堂念仏を調査した。期せずして、この年は、大野谷虫供養の輪番が亥年羽根地区から子年の北粕谷地区へと引き渡される年に当たった。そのため、地区の方から9月15日に知多市羽根公会堂で行われた大野谷虫供養羽根道場大念仏、また同年12月20日知多市金沢公民館で行われた大野谷虫供養北粕谷道場入仏式、翌年1月9日に行われた北粕谷道場おためし粥占いの行事のお誘いを受けたので、参考までにそれらの民俗行事の録画記録を撮影させていただいた。

2回の隨應寺十王堂念仏、大野谷虫供養羽根道場大念仏、大野谷虫供養北粕谷道場入仏式、北粕谷道場おためし粥占いの記録映像をビデオ録画させていただいた。これらの行事をご案内いただいた北粕谷祭り保存会副会長の青木哲雄氏の説明によると、「十王堂念仏で唱えている経と、虫供養で唱える経は同じものであるが、虫供養については地区ごとに若干唱える経や節回しは異なる箇所があるが、中心的な経が『般若心経』と浄土真宗の『現世利益和讃』（親鸞聖人が詠じた十五首の和歌に独特の節回しを付け和讃としたもの）であることは共通している」ということであった。まさにその通りで、『現世利益和讃』は親鸞聖人の元の和歌の合間に入る合いの手部分は、2つの地区では異なっていた。また、前稿で原型ないし経題が不明の陀羅尼が北粕谷のものにあると記載した。改めてその陀羅尼部分を引用すると次のようである。すべて、ひらがなの表記で、古くはおそらく口伝であったため、伝承されている間に、少しずつ形が変わってきたのではないかと推定するが、経題も記されていないためなお特定困難な陀羅尼となっている。

なむふどや なむたもや なむすんぎゃや
 なむびしゅだしゃや なむあかかふしゃや
 なむこさばかりや たてどう
 しゃみりい ばきびるしゃや
 たんもとのしゃのう きちみりい
 ばぎばしゃのや はらさんもこう
 きちみりい さりぐちりい むくちりい
 さばさばやのう みりん はだかしゃや
 しりん さんばらさんもばらあ みりん
 はりん もこうの そわか

息災遠命並に三界萬靈 へ御回向

といった回向文が念仏の後に唱えられる。これらは、『現世利益十五和讃念佛清規』という題箋が張られているもので、大野谷虫供養当人に配布されていた手書きの文を特殊印刷した折本に記されている回向文であった。また、末尾に

昭和五十八年十二月
北粕谷阿弥陀道場

と記されているので、36年前の9月に大野谷虫供養の輪番が北粕谷区に引き渡され、その年の12月に行われた入仏式の儀式の際に、北粕谷区で制作した経本と考えられるものであった。

また、隨應寺十王堂の左脇壁に付けられている文化元年の再建札は、「右之諸佛萬人講以多力再建 萬人講願主 當村 傳右衛門 文化元年甲子六月吉祥日」と記され、文化元年（1804）六月に万人講（不特定多数の人に寄進を求めた講）の傳右衛門が寄進したことと、本尊地藏菩薩と十王とその本地仏との対照が記されている。十九世紀の初頭の再建となるため、宗教者としての熊野比丘尼が絵解きなどによる熊野への勧進を行っていたのは十六世紀中頃から十八世紀中頃くらいまでと仮定すると、この十王堂と熊野比丘尼との関係をものがたる直接的な資料は熊野観心十界曼荼羅以外には確認できないということになる。

十王堂念仏で使用されてきた念仏鉦（大）の裏側には、「為覚應宗意并 施主京太宮通布屋源右衛門心譽浄三 延宝三乙卯十一月十五日 天下一大和大掾氏次作」と延宝三年（1670年）の鑄造年が裏に刻まれた宗味鉦吾（紐が掛けられる形状の念仏鉦）であることがわかった。寄進者が、心譽浄三の法名ないし戒名をもつ京都大宮通の布屋源右衛門という人で、縁故の覚應宗意の菩提の為に、天下一大和大掾の称号と官位を持つ鑄物の名人氏次に延宝三年に鑄造させたものであることが読み取れた。法名ないし戒名と念仏鉦であることから浄土系の信者を思わせるが、時代的に、熊野比丘尼がまだ活躍していた時代であるので興味深いものがあるが、寄進者が京の布屋となるので、いかなる経緯でこの十王堂もしくは北粕屋村に伝来したのかの検討が必要であろうが、その手がかりは何も残されていない。

八社明神と大野庄周辺の熊野信仰と修験

北粕谷区本那智参詣曼荼羅、あるいは北粕谷区本熊野観心十界曼荼羅が伝来した隨應寺十王堂の元の所在場所は、知多郡大野庄北粕谷村の八社大明神、現在の知多市金沢にある八社神社であった。前稿（宮川、2020）では、八社神社に伝来する文明二年（1470年）と天正二年（1574年）、それ以降の古い棟札が曆年的に保存されているた

め、それらの棟札を調査した。江戸初期の棟札として、正保二年（1645年）の棟札と、貞享五年（1688年）の棟札が残されている。貞享五年の棟札は、この社の由来や祭神等について、かなり鮮明な行書体で書かれまた保存状態も極めて良いものであるが、異体字尽くしという書きぶりでかなり難読なものであった。その棟札を書いた当時の神職の高い学識が窺えるものであった。その棟札の表の下に、当時の神主青木弥太夫家則、次いで大野牟山祠官後藤式部行政、大榎大工二宮傳左衛門正次と署名されていた。札の裏には、当村（北粕谷村）庄屋久野次左衛門以下10名の北粕谷村庄屋の連署、南粕屋（谷）村惣氏子土井藤兵衛、庄屋江端庄右衛門と連署されていた。棟札表の大野牟山祠官後藤式部行政という表記がふと気になった。牟山社というと、知多市の朝倉に牟山神社という名前の古社が現存している。その神社の当時の神主が連署したのであろうか。大野庄朝倉村にその牟山神社があったので、大野庄牟山神社ということであったのか、それとも大野庄大野村（現常滑市大野町）に牟山社もしくは大野牟山社という名称の神社があり、その神官が代々後藤式部を名乗っていたのか。また、この北粕谷村の八社明神とどのような繋がりがあったのだろうか。ふと気になったので、確認してみることにした。ざっと神社の名称をインターネット検索したところ、牟山神社という名前の神社は知多市朝倉の牟山神社のみで、少なくとも常滑市の大野町には牟山神社という名称の神社は現存していない。しかし、この八社神社も、八所宮（文明二年棟札）、八所大明神（天正二年棟札）、八所両社（正保二年）、八社大明神（貞享五年棟札）、幕末（安政六年の棟札）は糟目神社、それから八社神社と時代により名称を変えてきたのである。また、『本國神名帳』もしくは『國內神名帳』に「正四位下櫛屋天神」を、枳豆志庄市原村の権現社とする『参考本國神名帳集説』の天野信景の説と、この北粕谷村の八社明神とする『張州府志』の松平秀雲（君山）の説があったことは前稿で詳しく論じた。同様のことが、その大野牟山に起きている可能性も否定できなかった。

牟山社と大野之庄の熊野信仰

前稿（宮川、2020）で触れた江戸初期の寛文年間（1661年～1673年）の知多郡の村々の基礎資料である『寛文村々覚書』から知多郡の部分である『尾州知多郡覚書帳』の記載から検討した。この基礎文献は、『寛文村々覚書（下）知多郡』（『尾州智多郡覚書帳』）として、名古屋市教育委員会が昭和58年（1983年）に校訂復刻版を刊行している。現在牟山神社という名称の神社が現存している知多市朝倉（旧大野之庄朝倉村）の寺社の記述を見てみるとつぎのような記載となっている。

『尾州智多郡覚書帳』

大野之庄 朝倉村

一社式ヶ所 内 大明神 愛宕 当村弥宜 権三郎持内

本國帳知多郡小倉神社旁註小倉村右三狐神祠
 蓋是歟但牟山神社 小倉村大野村為両村
 本居之社則以牟山社為小倉神社

朝倉村と大野村についてはほとんど前述の『寛文村々覚書』からの転記であり、新しい記載内容はない。また、朝倉村の大明神の神主は当村称宜権三郎とあり、名字や官位がない神主と見え、貞享五年（1688年）の八社大明神の棟札に署名のある大野牟山後藤式部は、朝倉村の大明神というより、大野村の牟山権現という可能性の方が高いのではないだろうか。なお、この大野村の記述で、もう一つ興味深い記述がある。それは、その同じ大野村に、風宮という名称の社があり（現在も名鉄常滑線大野町駅のすぐ裏手にあり）、修験の山伏吉祥院が預かっていたという記述である。

知多郡内の修験について論考した山形（2015）の研究があるが、その論考に、知多郡には『寛文村々覚書』に修験者として、4人の修験者の記載があると指摘している。それは、藪之庄藪村（現在の東海市養父町）浅間社別当の山伏住大院、木田之庄横須賀村（東海市横須賀町）の御葭社別当の山伏大京院、大野之庄大野村風宮の山伏吉祥院、いずれも真言当山派（醍醐寺派）の山伏、英比之庄石浜村（知多郡東浦町石浜）の天王社・八幡社・弁才天社・山神祠・権現社の五社の別当ないし堂守を兼ねた山伏明寿院で、この山伏のみは天台宗本山派（聖護院派）の山伏であり、いずれも尾張と美濃の修験方支配を任じられていた名古屋城下南寺町（名古屋市中区大須）の富士山観音寺清寿院支配だったという。その支配下の修験者が、大野村風宮の山伏吉祥院であったと考えられる。なお、風宮の本宮は伊勢外宮豊受大神宮の境内別社であり、牟山権現社は、伊勢國多気郡相可村（現在の三重県多気郡多気町相可）に鎮座した延喜式内社の相鹿牟山神社を勧請した社であったというので、ともに伊勢皇大神宮と関わりの深い社であった。なお、相鹿牟山神社は現在相鹿上神社に合祀された神社で、伊勢街道と熊野街道が交差する場所なので相鹿という地名の社だったという¹⁾。

参考までに、『寛文村々覚書』の上記の大野村風宮の吉祥院を除く、3人の山伏について記載を部分引用する。（ ）で示す現在の所在地は旧村の相当する場所であり、必ずしもその所在地に風宮を除けば修験道寺院の後身が現存しているかどうかは不明であるが、木田之庄御葭社の大京院は、上記の山形は後の大教院と同じと比定している。

藪之庄 藪村	(東海市養父町)
一社四ヶ所 社内 壺町五反九畝式歩	前々除
神明 大明神 山之神	当村称宜 新大夫持内
浅間	当村山伏 住大院持内

(復刻 pp. 20-21)

木田之庄 横須賀村 (東海市横須賀町)
 一社七ヶ所 社内壺町四反三畝貳拾歩 前々除
 若宮八幡 諏訪明神 浅間 社宮神
 内 当村祢宜 松大夫持内
 女躰権現 五社明神 神明 同断 次郎大夫持内
 一御葺社 当村山伏 大京院持内
 地内 年貢地

(復刻 pp. 22-23)

英比之庄 石浜村 (知多郡東浦町石浜)
 一社五ヶ所 内 天王 八幡 弁才天 当村
 山神 権現 山伏 明寿院支配

(復刻 pp. 114-115)

文献については少し先走りをした余談であるが横須賀村の大京院を大教院とするのに、興味深い書き込みが、名古屋市蓬左文庫が所蔵する『張州雑志』に残っている。安永年間頃(1772~1780)に内藤正参(雅号東甫)が領内調査の上執筆、赤林信定編纂し寛政元年(1789年)尾張藩主宗睦に献上されたものであるが、長い間秘蔵されていたという尾張藩の地誌の本である。この本は、昭和50年(1975年)に愛知県郷土資料刊行会から復刻版が出版されているが、その第一巻(原本では巻第三にあたる)の横須賀村之神社の山神祠の記載箇所に次のような記載がある。

『張州雑志 卷第三』

教

山神ノ祠 在ニ上横須賀ニ同所大京院守レ之

(復刻版 p. 241)

元の記載は「大京院」と書かれていたが、その「京」の字の上に○を重ねその脇に「教」と書き込まれている。とすると現在その所在場所に大教院という日蓮宗の寺院が所在しているので、あるいはその後身寺院の可能性もある。また、その『張州雑志』の横須賀村の寺院の末尾に以下の記載があり、修験寺院大教院と記載されている。

薬王山大教院 在ニ横須賀中町ニ

修験者属ニ府下清壽院ニ

本尊薬師如来

(復刻 p. 248)

なお、八社神社の古名を巡る「正四位下櫨屋天神」関連の資料で登場した天野信景が宝永四年（1707）にまとめた『本國神名帳集説』（一般書誌名『尾張國神名帳集説』）があり、その享保十九年（1734年）転写本が、同じく愛知県図書館貴重本デジタルライブラリーで公開されている（<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103283156-001.pdf>）。

大野之庄の村々にある古社は以下のものであり、朝倉村の牟山社、あるいは大野之庄のいずれかの村にある社で、牟山と名のつく社は記載されていない。従四位下以上の神階のある社しか記載されていないからある。

従三位 日長天神 大野庄 大草村 稱^ス日長ノ森^ト一
 従三位 箭比天神 大野庄 矢口村 稱^ス権現ノ社^ト一
 従三位 三御天神 大野庄 宮山村
 従三位 小倉天神 大野庄 小倉邑 稱^ス三狐神^ト一祠
 従三位 鋤山天神 大野庄 前山村

ただし、上記「従三位 箭比天神 大野庄矢口村」とある社は、英比之庄矢口村の誤記ではないかと推定されるので、大野之庄の村々にある従四位下以上の社は残りの四社である。いずれにせよ、大野牟山社に関連した記載はない。ところが、さらその50年後の宝暦二年（1752年）にまとめられた松平秀雲（君山）の『張州府志』という書物があり、これも名古屋史談會編纂で昭和49年（1974年）『張州府志 全』として復刻版が刊行されている。その上記小倉天神に関わる記載を見たところ、探していた大野牟山神社についての記載があった。

『張州府志』

小倉天神祠 在^ニ小倉村^ニ 俗稱^ス三狐神^ト 謹按^ニ本國帳^一本^ニ従三位小倉天神是也 但大野牟山神社 大野小倉両村為^ニ本居神^ト 則疑為^ニ小倉神社^ト歟 姑俟^ニ後人^ト一
 （復刻 p. 740）

ざっとその大意を、訳すると次のようになる。

小倉天神の社は、小倉村にある三狐神と俗称される社であり、『本國帳』の従三位小倉天神のことではないかと考えられる。ただし、大野牟山神社が、大野村と小倉村の氏神であるため小倉神社と名を変えて（その小倉天神の後身の社として）いるが疑わしい。（この判断が正しいかどうかは）後人に委ねる。

前稿（宮川，2020）で記述したが、『本國帳』すなわち『本國神名帳』（一般書誌名

で『尾張國神名帳』の「正四位下櫨屋天神」について、天野信景は枳豆志庄市原村権現社と推定していた。

正四位下 櫨屋天神 枳豆志庄市原村権現社

つまり天野信景は正四位下櫨屋天神を、現在の知多郡武豊町に含まれる旧市原村の権現社と推定した。北粕谷村の八社明神としたのは、松平秀雲の上記の書物であるということを前稿（宮川，2020）で論じたが、この従三位小倉天神が旧小倉村の三狐神の社ではないかという見解は、天野信景と松平秀雲とは同一であったということとなる。

また、先に記述した朝倉村の社については牟山の詳しい記載は『尾張府志』にはないが、朝倉村の牟山祠という表記が登場している。この時代、大野村の大野牟山神社と朝倉村の牟山祠と二社の牟山社があったということは確かであろう。

【牟山祠】【愛宕祠】俱在朝倉村

(復刻 p. 745)

次に、先に横須賀村の大京院ないし大教院について少し先走りして参照しているが、名古屋市蓬左文庫が所蔵する『張州雑志』に関して二か所の牟山社についてふれる。安永年間頃（1772～1780）に内藤正参（雅号東甫）が領内調査の上執筆、赤林信定が編纂し寛政元年（1789年）尾張藩主宗睦に献上されたが、長い間秘蔵されていたという尾張藩の地誌の本である。

『張州雑志』復刻第一巻

原本で

『張州雑志 卷第五』

朝倉村 大野荘

神祠

牟山祠 神主酒井氏 愛宕祠 神明祠

(復刻 p. 397)

『張州雑志 卷第七』

知多郡

大野村 大野庄

神祠

牟山権現ノ社 在ニ高須賀町ニ 社司後藤氏
 有ニ拝殿鳥井撰社ニ 祭礼八月朔日山車一輛
 牟山ノ神号ハ當時伊勢神宮末社相感（鹿）牟山ノ神ヲ勸
 請セシヨリ此社号ト成リ云云牟山ノ神社ハ本國
 帳ニ云從三位小倉天神也故ニ小倉村大野村為トニ兩
 村ノ本居ノ社ニ云謹テ按スルニ此説恐クハ非ナラン歟本國帳ニ所謂ル小
 倉ノ天神ハ今小倉村称ルニ三狐神トニ社是也ト國帳集説ニ
 見エタリ

江崎権現ノ祠 社司木訥氏
 有ニ拝殿鳥井ニ 撰社稻荷祠 愛宕ノ祠

（翻刻 pp. 548-549）

朝倉村の牟山祠（社）の神主は酒井氏、大野村の牟山権現社の社司（祠官）は後藤氏で、前稿で記載した北粕谷村八社大明神の貞享五年（1688年）の棟札に署名のある大野牟山後藤式部行政とは、その時代の太野村の牟山権現社の神官と判断して良いだろう。この小倉天神の比定を巡る内藤正参『張州雜誌』の見解は、松平秀雲の『張州府志』の見解をそのまま踏襲したものであろう。2つの牟山社は、ともに伊勢神宮の末社であった伊勢國多氣郡相可村（現在の三重県多氣郡多氣町相可）にあった延喜式内の古社相鹿牟山神社を勸請したものという。

ただし、現在の相鹿牟山上神社のサイトによると¹⁾、この相鹿牟山神社は、中世に廃れ現在は多氣郡相可にあった4つの式内社、相鹿牟山神社・相鹿牟山上神社・伊蘇上神社・相鹿大木御神社の4社をまとめ、相鹿牟山上神社に合祀されているという。祭神は、本来相鹿牟山神社大鹿嶋命と臣狭山命、相鹿牟山上神社が天兒屋根命であったが、配祀神として他の大彦命、伊弉那岐命、天忍穗耳命、天津彦根命、活津彦根命、熊野久須毘命などととも祀られている。これらの神々の内、熊野久須毘命は熊野那智大社の祭神で、伊弉冉命ともされている神であることに注意を払うべきであるが、大野牟山権現社の社号が同村の江崎権現と同じく権現と称しているのであるが、いかなる祭神を主祭神としていたのであろうか。一口に権現といっても、神仏習合の山岳信仰修験と結びついた権現は、様々な権現がある。熊野権現・山王権現・蔵王権現・立山権現・白山権現・富士山権現・秋葉権現などこの時代広く信仰されていた権現があったからである。

なお、当時の太野村の修験あるいは信仰に関連して、『張州雜誌 卷第七』の寺院の項の末尾にはもう1つ興味深い記述がある。これは、十王堂と2つの修験寺院の記述である。十王堂は、現在も常滑市大野町8丁目の三叉路の角にある十王堂であろう。また、2箇所の大法院、光明院で、共に府下（名古屋城下）清壽院に属すと記載されるので、共に当山派の修験寺院（ないし修験者）であろう。前稿でも大野庄北粕谷村

について参考にしたが、尾張藩が持っていた領内の村々の古地図を徳川林政史研究所が引き継いで所蔵している。その古地図を常滑市が昭和52年（1977年）に常滑市に属する旧村の古地図を、ほぼそのままの大きさに『常滑市村絵図集』として刊行している。それらの村絵図は制作年が記載されているのといないものがあり、記載されているものは文政二年（1819年）から天保十五年（1844年）作成のものが多いため、年号が記されていないものもその頃のものと考えられている。その中の（制作年不明）『七 大野村絵図』を見てみたところ、大法院と光明院の2つの修験寺院がその地図上に記されているのを見つけた。光明院は、古地図では新町の通り沿いに社と寺の書かれたスポットが描かれ、また同名の真言宗醍醐寺派の寺院が大野町9丁目に残っている。またもう一つの修験大法院は、大野村高横須賀町の大草村境に近い（現在の町2丁目）通りに面した場所に大法院と記され、その隣に小さな社が描かれている。現在その場所に秋葉神社が残っており、その隣の高横須賀集会所となっている場所が大法院と比定できるスポットである。なお、この古地図には前述の牟山権現の社は「小倉天神」と記された社となっている。いずれにせよこの古地図と『張州雑志』の記録は、旧大野村の牟山三社権現社と大野村の修験に関わる数少ない残された記録である。

『張州雑志 卷第七』 大野村 寺院

十王堂 属_二東龍寺_一

薬師堂 属_二西念寺

薬師堂一字 神明ノ祠 秋葉権現

右修験大法院 属_二府下

清壽院_一 守_レ之

秋葉権現祠一字 修験光明院 属_二府下

清壽院_一 守_レ之

（翻刻 pp. 579-580）

次のこの大野牟山権現社が、どのような祭神を祀る権現社であったかは、安永八年（1779）蛙面坊茶町（作者名で、本名は鈴木作助という尾張藩御徒衆）の『蓬州旧勝録』にその記載がある。愛知県図書館の所蔵本は、愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー（<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/28.html>）として公開されているが、その『卷十八 知多郡 大野庄』の項にその記載がある。そこには牟山権現という略称ではなく、牟山三社大権現と記され、祭神は明らかに熊野三社権現が祀られていたことを示している。また、熊野本宮大社の祭神高皇産美命 伊弉冉命を記し、その次に少し小さな文字で、牟山戸権現と云々と記されている。本宮大社の祭神高皇

産美命・伊弉冉命に加えて、牟山戸権現を祀っているということか、本宮大社の祭神を牟山戸権現と一体化した神として扱っていたかのいずれかであろう。また、東の社に新宮大社の祭神新宮速玉男の神に春日大明神を祀り、西の社に那智大社の祭神と稻荷保食命と、牟山神社の祭神大香山戸の命を祀っているということで、この牟山三社権現は、熊野三山と相鹿牟山神社の神を祀る神社ということになり、間違いなく大野庄で熊野三社権現を祀った神社となる。なお、この牟山三社権現社は、天保九年から天保十五年（1844年）に岡田文園・野口梅居が木版本として刊行流布した『尾張名所圖會 第六』（愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103264400-001.pdf>）に「牟山戸権現社」として記載されている。内容は、社の名称を牟山戸権現社としている他、大野村高須賀町の東にあり、本社の祭神を高皇産霊尊伊弉冉尊、東社の祭神新宮速玉男春日大明神、西社の祭神那智事解男稻荷保食神大香山戸臣命とし、近世勅許を受けて正一位の神階を奉進したこと、牟山の社号は伊勢の末社相鹿牟山の神を勧請したことにより牟山戸権現という、神官は後藤氏と記している。

他に大野庄の熊野神社には、石瀬村（現在の常滑市金山屋敷）の熊野権現祠の記述が『張州府志 第二十九 知多郡』の「神祠」（翻刻 p. 749）『張州雑志 卷第七』（翻刻 p. 592）に残されている。熊野神社として現存しているほか、小倉村（現常滑市小倉町）にある時宗の古寺小倉山蓮臺寺の鎮守として熊野権現が祀られていたということが、『張州雑志 卷第六』（翻刻 p. 531）『蓬州旧勝録 卷十八』「小倉山蓮臺寺」の項に記載されている。それから、勿論本稿をまとめるきっかけとなった、旧北粕谷村（現知多市金沢郷中）の八社大明神（現在の八社神社）に祭神として熊野権現が祀られており、それが大野牟山権現と八社大明神を結び付けていたということが、推定できるのではないだろうか。

『蓬州旧勝録 卷十八 知多郡』

		祠官
○牟山三社大権現	大野高須賀町	後藤長門守
	裏ニ鎮座	

本社祭神	高皇産美命 伊弉冉命 牟山戸権現ト云
東ノ社同	新宮速玉男 春日大明神
西ノ社同	那智解男 稻荷保食命 大香山戸 御命

鎮座時代不知近世奉願 正一位の神階を奉候牟山ノ神
 號は當時伊勢の撰社相鹿牟山の社を勧請せしより
 此社号となれり 祭礼毎年朔日山車一輛高須賀
 町より右社前迄引渡ス神樂舞神子舞糸からくり

幕水引共に皆木綿人形衣装布類囃子笛太鼓也

○風宮 拝殿 大野高須賀町 是
鳥居 近所 宝蔵寺扣

○江崎権現 大野西 社人
拝殿 鳥居 濱辺方 木納長太夫
撰社 ○稻荷宮 ○愛宕社

祭り

社人

○内宮 大社也 大野砂子町海辺 小田井甚太夫
社地三畝十歩備前除

祭神伊勢太神宮

撰社

○八幡宮 ○天満宮

宝物 神鏡双酉 宝劔一振 師子頭一

祭り六月十六日山車一輛鍛冶町より橋詰町迄引渡²車一輛は

葵車二条の後幕水曳人形衣装共に木綿囃子笛太鼓也

九月十五六日六月十五六日湯立神事執行

○外宮 同 大野西ノ口地 祢宜
海辺 棚川数馬

祭神 伊勢太神宮 撰社 ○天満宮 ○稻荷宮 ○小社
拝殿 鳥居 文庫 蔵書閣の額

祭り

右両神明宮大社也 牟山の神社と共に古く宮山の城主

佐治与九郎建創と云う也

○(大野莊小倉村寺地 時宗洛陽四條金綾山金蓮寺末出世相阿弥
五畝歩余備前除 小倉山蓮台寺

本尊 阿弥陀 作不知

元享二壬戌年九月朔日寂

開山即轉上人 俗姓藤原氏 ○地藏堂

八十五歳寂 ○鎮守熊野権現社

門外 衣掛松 (至而古樹勅使御衣を掛^レ給ひし松
と云一説に大中和尚の墓印也候云

不明門（勅使門傳云表門也常に扉を打
て出入無し平生は括^{クグリ}小門より出入す
後花園院帝勅使通行ありし
ことと云也

壽山塚 駿河守死去の砌宮山の齋年寺境内狭く殊には
本城に近き故當山の地を借り葬式在り不明門外に古松
一株あり其下に舊き五輪あり中興門内墓の前へ易地すその
壽山塚と云是也と寺説に云候

當寺開基正和三寅年一色左京大夫道秀建創也
後正和三寅年より寛政四子年迄四百七十九年と成む

○（小倉村廣地一畝歩 時宗同所蓮台寺末 平
地境年貢地 行生庵

本尊十一面観音 弘法大師作丈六像 開基時代不知
當郡十六番順礼所

『尾張名所圖會』

愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー

<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103264400-001.pdf>

卷六 岡田文園・野口梅居著 小田切春江・森高雅絵

前編 天保十五年（1844年）刊行（復刻版 尾張名所図会（中巻）p. 116）

牟山戸権現社 同村（大野村）高須賀町の東にあり

本社 祭神高皇産靈尊 伊弉冉尊

東社 祭神新宮速玉男 春日大明神

西社 那智事解男 稻荷保食神大香山戸臣命 近世勅許を受けて正一位の神階を
奉進す

牟山の社號は伊勢の末社相鹿牟山の神を勧請せしより称するとぞ

神官 後藤氏

知多市金沢郷中にある八社神社（旧名で八社大明神）の貞享五年の棟札に記載の
あった大野牟山の祠官後藤式部は、旧大野村にあった牟山権現社ないし牟山三社権現
社の神官であった。その神社は伊勢國多気郡相可村（伊勢神宮外宮上部大夫・春木大
夫領地）にあった古社相鹿牟山神社を勧請したもので、祭神は牟山の神大香山戸臣命
と熊野三山の神々を祭神とした、熊野神社であったと考えて良い。その神社と、伊勢

熊野の神を祀る社ということで、北粕谷村の八社大明神とのつながりが見えてきた。また、その牟山権現社と接続した場所にある風宮は伊勢外宮の末社で航海の安全を祈念する社で、江戸初期は修験者が堂守をしていた。またその大野村は、対岸が桑名・津の大野湊として栄えた町で、伊勢・熊野あるいは修験に関わる寺社が多い場所であった。湊町であり、戦国末までは宮山城・大森城の城下町としても栄えた町であった。また、その町筋に牟山三社権現社や航海の無事を祈る風宮や江崎権現とした神社があり、伊勢の内宮や隣接する西之口村には外宮を祀る西之口神明社があるなど、伊勢熊野信仰の篤い場所であった。熊野比丘尼との関係はやはり何も見えなかったが、大野湊と村を縦に横切る通りとの三叉路に十王堂が立てられていることや、隣接した小倉村には伊勢外宮の豊受大御神を祭神とする三狐神社ないし小倉天神を祀った古社や、熊野本宮大社を阿弥陀如来の垂示として信仰し、尼僧の地位が男僧と平等に近いものであったといわれる時宗の古寺蓮臺寺があるなど熊野比丘尼の活動とつながりやすい条件が大野村と周辺にはあったものの、依然として北粕谷本的那智参詣曼荼羅と熊野観心十界曼荼羅が、八社神社と隨應寺十王堂に至る熊野比丘尼や熊野修験者の足跡を辿る直接的な手がかりは得られなかった。

謝 辞

本研究は、隨應寺十王堂当屋で北粕谷祭り保存会副会長の青木哲雄様、八社神社の総代で知多市文化財保護委員の久野與吉様をはじめとする北粕谷区の皆様には、調査の機会を与えていただきまた貴重な情報をご提供下されたこと、古文書の翻刻に際して、椋山女学園大学文化情報学部の飯塚恵理人教授にご教示いただいたことを記し感謝申し上げます。

■注

- 1) 相鹿神社のサイト https://genbu.net/data/ise/ookagami_title.htm

■引用古文書

- 『尾州知多郡覚書帳』寛文年間（1661年～1673年）
名古屋市教育委員会 昭和58年（1983年）寛文村々覚書（下）・地方古義
校訂復刻名古屋叢書続編 第三巻 愛知県郷土資料刊行会
- 『寺社名録』尾張藩寺社奉行所 寛保二年（1742年） 嘉永四年（1851年）転写
愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー
<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103268875-001.pdf>
- 『張州雑志』安永年間頃（1772～1780）内藤正参（雅号東甫）
名古屋市蓬左文庫蔵『張州雑志』第一巻 昭和50年（1975年）愛知県郷土資料刊行会
- 『本國神名帳集説』（一般書誌名『尾張國神名帳集説』）天野信景 宝永四年（1707）享保十九年（1734年）転写
愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー
<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103283156-001.pdf>

5. 『張州府志』宝暦二年（1752年）松平秀雲（君山）
復刻版 名古屋史談會編纂 昭和49年（1974）『張州府志（全）』愛知県郷土資料叢書 第十九集
6. 『張州雑志』安永年間頃（1772～1780）内藤正参（雅号東甫）執筆，赤林信定編纂
復刻版 名古屋市蓬左文庫蔵『張州雑志 第一巻』昭和50年（1975年）愛知県郷土資料刊行会
7. 『蓬州旧勝録』安永八年（1779）蛙面坊茶町（作者名で，鈴木作助，尾張藩御徒衆）愛知県図書館の所蔵本 愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー
(<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/detail/28.html>)
8. 『尾張名所圖會』
愛知県図書館貴重本デジタルライブラリー
<https://websv.aichi-pref-library.jp/wahon/pdf/1103264400-001.pdf>
巻六 岡田文園・野口梅居著 小田切春江・森高雅絵
前編 天保十五年（1844年）刊行
『復刻版 尾張名所図會』上巻・中巻・下巻 昭和45年（1970年）愛知県郷土資料刊行会
9. 『知多郡大野村絵図』徳川林政史研究所所蔵 制作年不明
復刻版 常滑市誌編集委員会 昭和52年（1977年）『常滑市誌 近世村絵図集』のうち『七 大野村絵図』

■引用文献

- 宮川充司 2019 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅳ)—新出北粕谷区本の階層的クラスター分析による分類— 椋山女学園大学教育学部紀要, Vol. 12, 23-41.
- 宮川充司 2020 熊野観心十界曼荼羅とそのルーツ(Ⅳ)—補足, 北粕谷区本伝来の周辺— 椋山女学園大学教育学部紀要, Vol. 13, 199-228.
- 小栗栖健治 2004 熊野観心十界曼荼羅の成立と展開 塵界（兵庫県立歴史博物館紀要）, 15, 129-242.
- 小栗栖健治 2011 熊野観心十界曼荼羅 岩田書院
- 坂本要 2019 民間念仏信仰の研究 法蔵館
- 山形隆司 2015 近世の尾張国知多郡における里修験の活動と村—加木屋村中心に— 知多半島の歴史と現在, 30, 159-173.